

早春の会合唱団

創立30年 第10回演奏会

プログラム | 2024年3月10日[日] IMA HALL

創立30周年 記念演奏会に寄せて

合唱団顧問 織田 久男

私は目黒高校に昭和39年(1964年)から8年間在籍しました。赴任した年に入学した生徒の何人かの要望で、新しい音楽部を創設して一期生となりました。当然の事ですが、3年間私と一緒に活動できたのは6期生まで。7期生は2年間、8期生はただの一年間でした。その人たちが現在まで活動しているのです。

その間、3年目にNHK学校音楽コンクールで全国優勝、その後も全国準優勝するといった出来事がありましたが、そのこと自体は音楽部の目的ではなく、あくまで純粋に『真の音楽美』を追求するという、単に高校生らしくと言うのではない高邁な目的意識を持った活動の一環でした。短い在任期間でしたが、目黒高校創立記念式典に出演して、「式典が引き締まった」と喜ばれたり、NHK TVや民放ラジオへの出演も何回かありました。校内文化祭での演奏会はいつも満員の盛況でした…

音楽部は私が転任した後もOBOGが合唱を続けていましたが、今から30年前にそれまで部のシンボル曲だった「早春」(佐藤真作曲『蔵王』の終曲)から名前を採って『早春の会』を正式に立ち上げ、今日まで充実した活動が続けてきた次第です。今日の30周年記念演奏会と言っても、実はそれ以前の長い伝統の上に成り立っているわけです。

昨年暮れ何年振りかで彼らの練習を聴く機会がありました。団員もすっかり貫禄が出て感心しましたが、音楽的な伝統は継続しているのを確認できて嬉しく思いました。

今日の演奏会が成功するのを心から願っています。

PROGRAM

1部

指揮：玉置清明 ピアノ：仲谷智子

「花」（歌曲集 四季より）

作曲：瀧 廉太郎 作詞：武島羽衣

混声合唱組曲「心の四季」

作曲：高田三郎 作詞：吉野 弘

1. 風が
2. みずすまし
3. 流れ
4. 山が
5. 愛そして風
6. 雪の日に
7. 真昼の星

休憩

2部

指揮：玉置清明 ピアノ：米倉邦子

混声合唱とピアノのための組曲
「ある真夜中に」

作曲：千原英喜 作詞：瀬戸内寂聴

1. 愛から悩みが生まれ
2. この星に生まれて
3. 寂庵の祈り
4. ある真夜中に

指揮：玉置清明 ピアノ：岡部美佐子
ハープ：亥埜友理 コントラバス：玉置清明

スクリーンミュージック

編曲：玉置清明

・ I could have Danced all Night

作詞：Alan Jay Lerner
作曲：Frederick Loewe

・ The Days of Wine and Roses

作詞：Johnny Mercer
作曲：Henley Mancini

・ Moon River

作詞：Johnny Mercer
作曲：Henley Mancini

・ The Shadow of Your Smile

作詞：Paul Francis Webster
作曲：Johnny Mandel

・ Tonight

作詞：Stephen Sondheim
作曲：Leonard Bernstein

COMMENTARY

曲目私感：玉置清明

「花」 1900 年

名曲だ。この1曲だけでも、つくづく瀧廉太郎は物凄い作曲家だった、そしてもっと長生きできていたら日本の音楽界はどんな展開になっていたろうかと思いを馳せてしまう。独学と言ってもよさそうな大分県竹田での少年時代の音楽経験をへて、15歳で上京し開校間もない東京音楽学校予科に入学、20歳（1900年）には本科の嘱託の指導者となり、この「花」を作曲。おそらく楽譜資料も豊富ではない環境の中でわずか5年、ドイツ系ヨーロッパの作曲様式を見事に吸収し、澆漓とした音楽を生み出した。当時の他の日本人作曲家との差は歴然、圧倒的な存在感だ。そして21歳、ドイツ・ライプツィヒに念願の留学。しかし音楽院に入学してわずか2か月！肺炎で臥し4か月の船旅で帰国。作曲を続けるも23歳で他界。どんなに無念であったろう、どんな音楽が彼の耳の中に渦巻いていただろう…涙が滲む。

「心の四季」 1968 年

僕（等）が合唱音楽と出会った高校時代、高田三郎の「水のいのち」と「心の四季」は他の曲とは比べようもなく深く心に突き刺さった。高野喜久雄・吉野弘の人間の存在と心の有りようを執拗に問い続ける歌詞を、殆ど和声課題の模範解答そのままと言える禁欲的な作曲に載せて歌う。練習の度に毎回その詞を繰り返して発音し、必然的に自分自身の内面に問い掛け続ける。当時歌っていた他のどの曲とも、明らかに違う高田三郎の作曲姿勢を高校生なりに強く感じていた。歌っていて楽しいどころかむしろ辛い、考え続ける迷い続ける。そしてその深淵に嵌ってゆく快感、いや、考えを深めていく自分の成長感。そうだ、高田三郎の作曲意図は正にそこにあったのだ、歌う人に思索を求め、聴く人に問い掛ける、それができるのが合唱音楽なのだ、音楽によって人は精神的に成長するのだと。

その後50余年、人生のふとした場面あるいは何気ない日常の中で、繰り返し練習で歌った歌詞を反芻し思いを重ねてきた。そして時を経て今再び、問いを新たに自分の声に出す。歌う一人ひとりの、生きてきた自分自身の積み重ねを歌詞にのせて声に、歌う。一人ひとりの思索を自身のものとして。

練習は矛盾している。繰り返して歌う事で音楽の流れが一人ひとりの中に立体的に造形されていき、歌詞への思いを深めていく。同時にしかし、歌い慣れ、体の中に自然に流れるように沁みついてくると、それが、いつものように当然のように歌えてしまう。でも本当は、毎回新しくその瞬間に生まれ出たいのだ、今日の本番も。メンバーそれぞれが、歌詞を自身に取り込み自分事として表現すること、そこに音楽のリアリティが生まれる。

「ある真夜中に」 2006/7 年

なんと大胆な作曲だろう。なんと謎と優しさに満ちた詩だろう。気まぐれな調性変化、揺れ動く曲想。抱擁してくれる言葉、解釈を迫る言葉。愛に揺れる心、満たされる幸せ、広く豊かな心の広がり、熱く迸る想いと法悦。寂聴の言葉と千原英喜の楽譜によって、愛を求める心を音として紡ぎ出す。

「心の四季」が、自問しつつも迷いなくひたすらに求道し進むのに対して、この曲集は、明暗織りなす人生の波濤の狭間から喜びと悲しみを掬いとり、孤独の中で迷い、祈り、人間の愛おいしい愛と、宗教的な大きな愛と法悦を求め続ける。

「スクリーンミュージック集」

・ I could have danced all night {マイフェアレディ}

経験したことの無い心の芽生えと未来に飛翔する押さえられない気持ち、人生の新しい展開の期待を、リズムカルなバックコーラスにのせて。

・ The Days of Wine and Roses {酒とバラの日々}

幸せだった夫婦がアル中に病んでしまい、それぞれ別の生き様に別れてゆく辛いストーリー。幸せに満ちていた美しい日々を偲んで。

・ Moon River {ティファニーで朝食を}

♪故郷の月の映る川よ、僕はこれから新しい世界に旅立って自分を磨いてくるよ、そしていつの日か誇りを胸に、懐かしい川に帰ってくるよ、待っていてね心の友よ♪こんな意識を思いながら、満天の星を描くハープの音色に導かれて。

・ The shadow of your smile {いそしぎ}

冒頭で男は傷ついた磯嶋を助ける。ある日、心の傷ついた女性と海辺で出会い、二人は幸せな日々を過ごす。やがて傷が癒えて鳥のように飛び去ってしまう。織りなす追想を絡み合う合唱で。

・ Tonight {ウェストサイドストーリー}

火花が飛び交い世界が吹っ飛ぶような電撃的な出会いを果たしてしまった2人の情熱を、繰り返す転調の喜びにのせて。

早春の会合唱団としては初のチャレンジ、ジャズ風和声のスタイルながら、お聴き頂くように、音楽は全く早春の会の持ち味の表現そのもの。しかし、全曲英語で単語ごとの発音練習も、音符やバランスの扱いも初めての事だらけ。メンバー各人のたゆまぬ努力と取り組みに、編曲者指揮者として尽きない拍手。色彩感豊かな和声変化と多声的絡み合いで、曲の持つ心情を色濃く掘り起こそうと試みた渾身の編曲によるステージを、たっぷりと味わって頂きたい。

ある真夜中に

詩 瀬戸内寂聴

1. 愛から悩みが生まれ

愛から悩みが生まれ
愛から恐れが生まれる

それだから
愛する人を
つくるのはおやめなさい
愛する人を失うのは
とても不幸なことだから

愛することを
離れたならば
憂いも悩みも
消えはてる
恐れなんて
どこにもなくなる

愛する人も憎む人も
いない人には
悩みの絆が生まれない

2. この星に生まれて

あなたに出逢えたから
この星に生まれてよかった
あなたに出逢えたから
愛する喜び知らされた

あなたを愛したから
この星に生きてよかった
あなたを愛したから
淋しさや悲しみにも出逢った

それでも
この星に生まれてよかった
あなたに出逢えたから
愛する幸せ溺れるほど恵まれた
生きる喜びあふれるほど贈られた

3. 寂庵の祈り

幸せな時にはありがとう
苦しい時には力を下さい
淋しい時には聞いてください
いつも
(地球の) すべての人が
幸福で平和で
ありますように

4. ある真夜中に

ある真夜中
どこかの星の熱いため息が
花びらになって降ってきた
花びらは舞いながらささやいた
わたしはここにいます
そして あなたがそこにいてくださる
ああ 何というしあわせ
たとい永遠にあなたの額に
たどりつけなくても

ある真夜中
どこかの星の熱いため息が
雪になって降りしきった
雪は身を揉みながら歌った
わたしはここにいる
そして あなたがそこにいてくれる
ああ 何というよろこび
たとい永遠にあなたの唇に
たどりつけなくても

早春の会合唱団 歩み

1993年3月
都立目黒高校旧音楽部の卒業生を母体として発足

1993年10月
第39回目黒区合唱祭に参加 以後毎年参加

1994年11月
第36回都民合唱コンクール(東京文化会館)小ホール部門第一位

1996年10月
第38回都民合唱コンクール(東京文化会館)小ホール部門第一位

2000年6月
第1回演奏会 以後隔年開催

2005年1月
新美德英作品展に参加

2007年3月
高田三郎作品展に参加

2012年3月
木下牧子作品展に参加

2015年5月
国際芸術連盟主催のフォーレ生誕記念コンサートに参加

2018年7月
秦野市合唱祭に参加 以後毎年参加

2022年7月
第9回演奏会(ミニコンサート)

《とある練習日の独り言》

30年間、週一回集い音楽と芸術を語り喜怒哀楽も共にしてきた実に濃い仲間がいる。先に旅立ってしまった仲間もいるが、去っても応援し続けてくれる人、新しく加わってくれた人もいる。これから共に過ごすであろうそんな仲間に出会っている。何という幸せであろうか。そして更に幸せなのは60年前にこの合唱団のルーツを立ち上げ育ててくださった今年94歳になる恩師が目の前でお元気に演奏上のアドバイスをしてくださっていること。これからもずっとこの仲間たちと一緒に音楽を創っていきたい。

団長 平部正和



早春の会合唱団
ホームページ